

テーマ：「環境と意識の存在論：ギブソン、メルロ＝ポンティ、ホワイトヘッド」

生態学という形而上学—生態学的知覚論・行為論からの肝試し—

染谷昌義（高千穂大学人間科学部）

目下人類学は、非人間たち—人間以外の他の生物種（動植物）、土壌、空気、河川、人間が作り出した人工物など—との関わりやそうした非人間同士の間を民族誌的に記述する脱人間主義へと方向転換しつつある。人類学のこうした存在論的展開が向かう先は、人間の民族誌を非人間の民族誌からあぶり出すこれまでにない試みである。言い換えれば、人文学がこれまで依拠してきた自然／文化の二分法をも壊してしまう、形而上学的な転換である。遅ればせながら哲学もこの転換をフォローしたい。知覚心理学者であるギブソンが創始した認識と行動への生態学的アプローチがどのような世界観（自然観）・生命観・人間観に支えられているか、そしてそうした観点が哲学をどこへと牽引するかを肝試しのように提示したい。実はこうした生態学的発想の系譜はアリストテレスの自然学と心理学まで遡れるおそらく最も保守本道なのだが。論点として示したいことは次の3点である。1) 認識と行動は環境資源を利用する生態学的な活動の一形態であり、活動を規定するのは資源の存在である。2) 環境資源は認識や行動とは独立して存在するからこそ、認識や行動が可能になる。3) 他の動植物種も含め生物の認識や行動は、動かすモノと動かされるモノとの自然ネットワークにおける、動かさ

れて生じる変化である。

出来事あるいはプロセスとしての知覚：メルロ＝ポンティのホワイトヘッド

國領佳樹（立教大学他講師）

自然ないし世界についての私たちの捉え方には二種類ある。W・S・セラーズという言葉  
を借りれば、「日常的な像」（manifest image）と「科学的な像」である。私たちは  
この二つの像に引き裂かれている。『知覚の現象学』におけるメルロ＝ポンティの  
取り組みは、世界の日常的な像を適切に記述し、科学的な像に対するその優位を示そ  
うとするものであった。つまり、互いに外的で、因果関係によって結ばれたさまざま  
な出来事（物理学的・生物学的だけではなく心理的・社会的出来事）の総体としての  
自然（すなわち、自然の科学的な像）は、（日常的な像の）二次的な構成物とみなさ  
れるのである。したがって、私たちが生きるこの世界の解明を期待されていたはずの科  
学は転倒させられてしまうのである。しかし、存在論的プロジェクトに着手してい  
た後期のメルロ＝ポンティは、こうした発想をそのまま維持することはなかった。む  
しろ、知覚経験の現象学的探求に相応しい、自然の新たな存在論のモデルを構築する  
ために、自然科学の知見も手がかりにしようとしていたふしがある。そして、その同  
じ時期に、ホワイトヘッドの自然理解を検討していたことは興味深い。私の考えでは、  
こうした自然科学とホワイトヘッドへの参照は、〈互いに外的で、因果関係によって

結ばれた出来事」という概念を退け、〈プロセス〉としての出来事（とりわけ、知覚経験）を捉えるためである。以上のことをふまえて、本発表では、メルロ＝ポンティのホワイトヘッド読解の検討を出発点にして、ジェームズ、ライプニッツなどにも言及しつつ、出来事ないしプロセスとして、知覚経験を捉える存在論の構想を描きなおしたい。

存在と生成を超えて：有機体の哲学の射程

齋藤暢人（中央学院大学現代教養学部）

ホワイトヘッド形而上学の諸帰結は、哲学の歴史を振り返ったとき、そこに登場する解きたい難問に対する解答の試みとしても受け止めることができる。その妥当性と意義は真摯な検討に値するものであり、われわれにさらなる思索の進展を促しているが、とりわけ重要なのは、ホワイトヘッドが打ち出した「有機体の哲学」という立場がもつ哲学的インパクトを正確に評価することであろう。ホワイトヘッド自身が主張するように、近代科学の登場とともに広く浸透した、形而上学としての唯物論には、哲学的にみて重大な欠陥があり、その思想的克服は今日なお喫緊の課題であり続けているからである。だが、この「自然と精神の分裂」とでも定式化できる問題は、実のところ形而上学の事実上の起源、ソクラテス以前の自然哲学にまで遡行することができるのであり、したがって、この問題を解決しようとするホワイトヘッドの努力は、

形而上学に根本的に新たな枠組みを与えようと試みることに等しいのである。残念ながら、この挑戦の意義は十分に認識されているようにはみえない。そこで、哲学の思想的起源まで立ち戻り、問題を素朴なまでに簡明な図式において整理することによって、有機体の哲学の急進性を明らかにすることを試みる。存在と生成の対立を知性原理と多元論によって止揚しようとするかつての思弁的冒険は、ホワイトヘッドの寄与により、さらにその先へと向かって引き継がれてゆくのである。